

## Five Children and It にみる

### 砂の妖精の魔法について

津 島 克 子

Edith Nesbit (1858~1924) は、Lewis Carrol (1832~1898) の影響をうけながら、独自の妖精を登場させた作品を生みだした。その特徴は、以前のような宗教的教訓性がうすらぎ、妖精や魔法が夢や現実離れた世界のみではなく、日常生活の中に作用している点にある。

Nesbit には子供向けの作品だけではなく、大人向けの小説もあるが、*The Story of Treasure Seekers* (1899) を起点に、子供向けファンタジーの作品を書くようになる。*The Story of Treasure Seekers* で一躍有名になり、次に書いたのが *Five Children and It* (1902) であった。

リアン・H・スミスは、「ファンタジーは登場人物たち同士の相互関係や、人物と出来事との関係を私達の好奇心をかきたてるような方法でえがきだしたものでなければならない」また「テーマが子供本来の興味をひくものでなくてはならない」と言っている。

*Five Children and It* は、この二つの要求にじゅうぶんかなっている。主な登場人物は、五人の兄妹、お手伝いの人、そして妖精である。この妖精は、従来のものに比べ非常に個性が強く、高慢でお天気や、そしてあまり魔法を使いたがらないという風変りな妖精である。また五人の子供たちも Nesbit 以前の作品に見られるような行儀がよく、静かな子供ではない。元気がよく、いたずらやけんかはもちろん、静かにしていることなど出来ない、いわば普通の子供たちである。

妖精の名前は Psammead [sæmjəd] といい、砂の中に住む sand-fairy である。この妖精は、私達が fairy という語から想像するものとは程遠

い姿、形をしている。

Its eyes were on long horns like a snail's eyes, and it could move them in and out like telescopes; it had ears like a bat's ears, and its tubby body was shaped like a spider's and covered with thick soft fur; its legs and arms were furry too, and it had hands and feet like a monkey's.

太古の時代から砂の中で生き続けてきたのであるから、気むづかしやながら、その話は大変愉快である。

Why, almost everyone had Pterodactyl for breakfast in my time! Pterodactyls were something like crocodiles and something like birds — I believe they were very good grilled. ....

この妖精には弱点がある。水に触れるとだめなので、雨水でも涙でも一切、水は禁物である。

'Oh, my left whisker!' it said; 'don't let him touch me, He's wet.' Its fur stood on end with horror — and indeed a good deal of the ginger-beer had been spilt on the blue smock of the Lamb.

このような妖精の創造は、奇想天外に思える。しかし、それこそいたずらざかりの子供たちが喜ぶことまちがいなしであった。

新しく越してきたばかりの家の近辺を探索してまわっている子供たちは gravel-pit で、砂遊びを始める。熱中しているうちに、この奇妙な生きものを見つけて砂の中へ逃げようとする Psammead をみんなして引きづり出す。

Anthea suddenly screamed;

‘Cyril! Come here! Oh, come quick! It’s alive!

It’ll get away! Quick!’

They all hurried back, ‘It’s a rat, I shouldn’t wonder,’  
said Robert.

— ‘Oh, I felt fur,’ she cried, half laughing and half  
crying. ‘I did indeed! I did!’ ‘Let me alone,’ it said.

And now everyone heard the voice and looked at the  
others to see if they had too.

‘But we want to see you,’ said Robert bravely.

‘I wish you’d come out,’ said Anthea, also taking  
courage.

この奇妙な生きものは、意外にも威張った口のきき方をして、丁寧にもの言ってやらないと気を悪くする。そのことをのみ込んだ子供たちは、やっと彼の身の上話をさせるように話をもってゆく。人生の経験者と思いついでいるものは、自身のことを話すのをまず、いやがりはしないからである。その時に Psammead は、うっかりと自分が魔法の使えることを口にすべらしてしまう。

Psammead は長い間の一人きりに慣れていたせいか、年をとってしまったせいか、うるさい子供たちをさっさと追い払ってしまうために、魔法で願いをかなえてやるのを約束してしまう。かくして、九つの冒険が次々に展開する。その願いごとは、いわば自由な子供時代を過ごしたもののならば、一度ならず夢想したに違いないようなありふれた、しかし現実には叶えられない望みである。きれいになりたい、思いっきりお金を使いたい、空を飛ぶたい、早く大人になりたい、お城に住んでみたいなどと言ったことである。

しかし、また誤って望みもしないことが、叶えられるという失敗も起

きた、それは I wish…… という表現を何気なく口にするという日常の言語習慣が生みだしたまちがいであり、その経験にこりて子供たちは慣重になろうとする。しかし身についた言語習慣はなかなかとれないことを Nesbit はよく知っていた。

‘I only wish I was bigger than him, that’s all?’

He dug his fingers in the sand, and sprang up, for his hand had touched something furry. It was the Psammead, of course —. And of course the next moment Robert’s wish was granted, and he was bigger than the baker’s boy.

子供たちは、Cyril (長男)、Anthea (長女)、Robert (次男)、Jane (次女)、それに Hilary (三男) の五人である。Cyril の性格は、長男らしくおっとりとしていて、我慢強い。五人の中でさほど目立つ性格ではない。Anthea は、一度始めたことは最後まできちんとやり通さなくては気がすまない。また、つねに兄妹のチームワークを考えている。Robert は、一番元気な子で比較的五人の中で中心になる存在である。Jane は、あらゆることに好奇心をもち、すぐ夢中になり、物事を常に明るい方へ進めていく。また、あまえっ子で泣きむし。Hilary は、まだ赤ちゃんでやっとよちよち歩きができるようになったばかりで他の兄妹の仲間に入ることはできない。彼の片言が羊の鳴き声に似ているところから Lamb という愛称がついている。

それでは次に物語の中の具体的な出来事を二、三紹介しよう。

まず、第一の願いは、*Beautiful as the day* である。これは Anthea と Jane が常々思っていたことで、非常に女の子らしい希望ではあったが、きれいに変わりすぎてしまった為に、一番下の弟 Hilary (この子は小さすぎるため魔法にかかっていない) やお手伝いの人には見たことのない子になってしまう。陽が沈み魔法が消えるまで、みなは家の中に入

ることができなかった。Psammeadの魔法は、この兄妹だけにかかるものなので、お手伝いの人には、顔の変わってしまった子供たちのことがわからない。

Then the children looked at each other, and each children suddenly found itself alone with three perfect strangers, all radiantly beautiful.

‘We’re us, of course,’ said Robert. ‘And who’s us, when you’re at home?’ asked Martha scornfully. I tell you it’s us, only we’re beautiful as the day? said Cyril. ‘I’m Cyril, and these are the others, and we’re jolly hungry. Let us in, and don’t be a silly idiot.’

Martha merely dratted Cyril’s impudence and tried to shut the door in his face.

この時以後、それからは、お手伝いの人たちだけには一父と母は、それぞれ仕事と親戚の人の看病の為に不在—魔法による変化がわからないようにする魔法をかけてもらう。

次の願いごとは、*A castle and no dinner*である。うっかりお城に住んでみたいと言ってしまった為に、敵軍に囲まれた城に住み、軍隊と戦かわなくてはならなくなる。子供たちが城の中をみてまわると、奇妙な場面に合う。それは魔法が兄妹のみにかかり、お手伝いの人には魔法がきかないようになっているために起こるもので、魔法が現実生活の中に入ったために起こるいたづらである。子供たちには、お城しか見えず、お手伝いの人には、もとの家しか見えていない。

Near the middle of the courtyard stood Martha, moving her right hand, backwards and forwards in the air. The

cook was stooping down and moving her hands, also in a very curious way. But the oddest and at the same time most terrible thing was the Lumb, who was sitting on nothing, about three feet from the ground, laughing happily.

お手伝いの Martha の作ってくれた食事も子供たちにはみえないのである。

さて、この物語にもアリスのように身体が大きくなる話の一つある。いじめっ子に仕返しをする。これも弱い子の夢の一つなのだ。

その願いが *Bigger than the baker's boy* である。自分たちより大きなパン屋の子にいじめられ、仕返しをしようと大きくなったが、大きくなりすぎて3 mにもなってしまった。そして仕返しが済んでももとにもどらない。その為、祭りに行き見せもの小屋で見せものにし、お金をとることになる。これは魔法による失敗をうまく利用してしまった例である。3 mもの大きさは現実の世界の中では化物以外なく、そのことを逆に利用したのである。

以上のように、砂の妖精 Psammead の魔法がこの4人の兄妹たちのみにかかり、それがそのまま現実の世界と接触している為に、おかしい結果を得ている。また、お手伝いの人たちには気づかれないようにという希望を出した時点で、彼らも魔法の世界に入ってしまったのではないだろうか。そしてそれが物語の潤滑油となり、ユーモラスに話しが進んでいる。しかしその魔法に矛盾も生じている。第一に、妖精の魔力は兄妹四人全員に及ぼすはずである。実際その通りきれいになりたい、翼がほしいの時は、四人共きれいになり、翼がついた。しかし、パン屋の子より大きくなりたいたいという時には、希望をだした Robert のみが大きくなり、他の三人に変化はみられない。この事について Psammead は、'He's a rude violent boy, and it'll do him good to be the wrong

size for a bit……’ と言っている。第二に Psammead の魔力は陽が沈むまで消えないはずのものであるが、魔法によって現われたインディアンとの戦いでは、彼らが ‘Ah, for the boundless forests of my native land,……Ah, would we were but in our native forest once more!’ と歌い始めると陽が沈んでいないのに彼らは消えてしまう。第三、これは第二と逆に魔法によって出たもので、陽が沈んでも消えなかったものがある。それは、子供たちのだした古い金貨を気持ちよくうけとり、町まで馬車をだしてくれた良心的な馭者に渡したその金貨である。

以上の三つは Psammead の魔法の法則である四人の子供たちに魔法がかかる、ということと、その魔法は陽が沈めば消えるという約束を破っている。

また、一番末の Lamb だけにかかった魔法もあった。それは *Being Wanted* (Lamb を見る人みんなが彼をほしくなる)、*Grown up* (Lamb だけが大人になってしまう) である。

願いごとの最後は、I wish…… という口ぐせで大変な結果を齎してしまう。

母親が旅行から帰ってくるという日に近所で宝石が盗まれる。この話を聞いて、宝石などもっていない母親のために Jane は、‘Wouldn’t it be jolly,’ said Jane dreamily, ‘if mother could find all those lovely things, necklace and rives of diamonds and tarrers?’ と言ってしまう。母親が帰ってくると部屋の中からたくさん宝石がでてくる。おどろいた母親は町の警察に届けに出かける。そこで Anthea と Jane は急いで Psammead のところに行き、今日の願いを最後にするから宝石のことをみんなが忘れるようにと頼む。うるさい子供たちとのつき合いに疲れてきた Psammead は一日一回だけ願いごとを聞きとどける、というルールを破って、この望みを叶えてやる。これは、魔法によって叶えられるさまざまな望みを、現実の世界にひき入れてみた時にどのようなことが

起るかを描いているのが興味をそそられる点である。

信じられないことが起った時の囲わりの人々の反応は、常識の枠を出ないために、子供たちがありのままを言えば言う程チグハグになる。そこが面白い。

‘Where’d you get it?’ ‘Out of the gravel-pit,’ said truthful Jane. ‘Next article,’ said the man. ‘I tell you we did.’ Jane said. ‘There’s a fairy — there are over brown fur with ears like a bat’s and eyes like a snail’s, and he gives you a wish a day, and they all come true.’

‘Touched in the head, eh?’ said the man in a low voice, ‘all the more shame to you boys dragging the poor afflicted child into your sinful burglaries?’

しかし、そのチグハグはどこかで調節すべきだと作者は考える。そこで子供たちは早く陽の沈むことを、魔法の切れることを待ち望む。魔法なんてなければいいのと言います。

‘I don’t care who asks or who doesn’t,’ said Robert, ‘but Anthea and I think the Psammead is a spiteful brute. If it can give us our wishes I suppose it can give itself its own, and I feel almost sure it wishes every time that our wishes shan’t do us any good. Let’s let the tiresome beast alone, and just go and have a jolly good game of forts, on our own, in the chalk pit?’

ここに常識の枠を踏み出せないこの物語の性格がある。書かれた当時(1902)としては、大変新しいタイプの児童書として受けたのであろうが、ノンセンスの世界にのびのびと遊ぶ、アリスには比べようがない。その行きつく所は、もう二度と魔法なんかいらぬから、もとの状態にもどしてくれ、となる。



Anthea risked it and held on.

‘Look here.’ she said, ‘don’t bite me — listen to reason.

If you’ll only do what we want today, we’ll never ask you for another wish as long as we live.’

このような締めくくりは、笑いを誘うものではあっても、魔法に対する夢をひろげてはくれない。その意味では、魔法の世界に終止する、いわゆるおとぎ話の方がすぐれていると言ってよいであろう。